

蓮子さんは、腹を抱えて笑っていた。メリーさんは流石に笑いを堪えていたけど、それでも笑みを抑えきれないようだった。

「なかなか傑作ね、董子さん。でも、そういう痛い経験をして、人は大人になるのよ」

ちなみに、私が話したのはニーチェのことだ。昔、家族で旅行に行ったことがある。海辺にある、中々に素敵なホテルだった。両親は私を置いて海に行った。置いてと言うのは正確じゃないかな、私は海に行くような気分じゃなかった。そういう年頃だった。両親との旅行にも抵抗が出てくる。ましてや、海に行つて泳ぐつてのは抵抗の固まりだった。

だから、私は一人でプールに行った。ビームスで買ったTシャツをきてプールに行った。少なくとも、あの頃の私にはビームスで自分で買った服なんてのはそれはもうお洒落できらきらとしていたんだ。

私はパラソルの下に有る椅子に体を預けて、スマシ色でノンアルコールのカクテルを頼んだ。周りには「いかした」大人が一杯いた。たぶん、カクテルは旧型酒で、来ている服はバレンシアガやジバンシーだったんじゃないかな。

それでも、そんな愚民どもよりも私はいかしていると思つていた。ビームスで買ったTシャ

ツを着て、カクテルを飲んで、私の手元にはニーチェの——もちろん紙の本——があった。それを周りに見せびらかすように読んでいた。

ちなみに、ニーチェやツアラトウストラがどのように語っていたのかはよくわからない。ニーチェをリゾートで読む私をアピールするのに夢中で、本を読む暇なんてなかったからだ。

「でも、そういう方向性じゃないのよね。もつと神秘的でオカルト的な経験はないかしら？」

……なんでニーチェの話をしたかという「思い出したいくないような体験ってない？」と蓮子さんに聞かれたからだ。

「それは蓮子が悪いわ。『思い出したいくないような体験ってない？』なんて雑な聞き方をするから、蓮子さんは聞かれた通りに答えたんでしょう」

「そりゃそうだけど、だから聞き直してるんじゃない。何かそういう怖いオカルトない？」

「そもそも、そんな人のトラウマを探るようなことを言わないの。怖い話が欲しいなら自分で探してきなさい」

「といってもストックがないしなあ。しようがない、メリー、また一緒に探しに行こうか？」

「嫌よ。わざわざトラウマを探しに行くために出かけるなんてぞつとしない」

「嫌と言っても逃がさない。私たちはDr.レイテンシー。二人で一つの運命共同体」

「そんなゆでたまごや藤子・A・不二雄と藤子・F・不二雄みたいなことを言われても」

「今なんていった？」

「え？ ゆでと——」

「違う！ 藤子・A・不二雄って誰よ。藤子・F・不二雄はそりゃ藤子・F・不二雄。藤子不二雄Fの時代も合った。でも、安孫子先生はいつでも藤子不二雄Aなの。だいたい、ゆでとたまごじゃないでしょ。嶋田先生が『ゆでたま』で中井先生が『ご』なの。当人がインタビューでいったから確かな情報よ」

「そう」

メリーさんは蓮子さんと目もあわせずに、手元の鏡を見つめていた。

「なんでそんなに興味なさげに言うの？」

「だって漫画なんて興味が無いし」

「じゃあ漫画をネタにしなければいいでしょ」

「興味も無いのに蓮子が語るから嫌でも染みついちゃうのよ……」

「酷い……蓮子さん、メリーってこういうやつなの。ちょっと綺麗で賢そうで真面目で優しいとかぱっと見には見えるけどね、本性はこれだから。鏡を見ているのも、オカルトを探している振りをして、実際は自分は世界で一番の美人だなんて思ってるのよ」

極めて反応に困ることを言われた。私には曖昧な笑みを作って返事にするくらいしかできない

い。蓮子さんはともかく、メリーさんはほとんど初対面みたいなものなわけで。

「しようがない、メリー、あなたはDr. レイテンシー一号からクビよ、後任は董子さん、あなたね。メリーも反省しているなら秘封倶楽部の研修生活において実績を帯びればDr. レイテンシー三号として復帰もやぶさかではないけど」

「別にクビでもいいわ。やっぱりあの名前はちよつとどうかと思うし……素直に秘封倶楽部編集で出せばよかったんじゃないの」

「駄目よ、あの名前がいいの、どこの国の誰かもわからない、男か女かもわからない。一番良いのは、人名だつてことよ。Dr. レイテンシーは宇佐見蓮子であつて宇佐見蓮子じゃない、マエリベリー・ハーンであつてマエリベリー・ハーンじゃない。私たち二人で一人の個人になるの、それつてよくない？」

「別に……書いてるのは全部蓮子だし、私はあまりレイテンシーさんだと思つてないの」

「じゃあメリーもやっぱり書こうよ、私の文字起こしばかりは不公平でしょ？」

「やっぱり、日本語を書くのはなかなか難しいの。正確な文章を書けと言われればまだしも、軽妙洒脱で文学的なエッセイを書けと言われてもねえ。英語ならまだまじだけど」

「そうすると私も英語じゃないと統一感ないし……ああ、董子さん、こんなこと言つてるけど、メリーつて実は東北出身なのよ。やっぱり日本で育つてるの」

「そうなんですか？」

何一つ日本人と変わらない発音で話すから驚いていたけど、東北出身なんだろうか、それなら納得は出来るのかな。

「蓮子さん。蓮子ってこういうやつなの。私はアイルランド生まれだから」

「あのねえ、私は蓮子がおむつ姿でよたよた歩いてた頃から蓮子さんを知ってるのよ？ ずっと素敵なお姉さんとして外面をよくしてきてたんだからそういうこと言わない」

「あ、それは大丈夫です。蓮子さんのキャラは知ってますから」

うん、知ってる。蓮子さんは変わり者だった。賢くて美人だから許されているけれど、それでも喋らない方がきつと人気者になれるような人だ。

例えば……例えば……例えば、なんだっけ……よく、思い出せなかった。小さい頃から見知った親戚のエピソードが思い出せないとかあるのかな……まあ、あるか。蓮子さんには破天荒なエピソードが多すぎる。

「それにしても、メリーはさっきから何を見てるの？ 鏡よ鏡、世界で一番美しいのは私と願ってるの？」

「幻視に決まってるでしょ。別に、私は鏡に映す必要なんてないわ。私の目は結界を超えられる。でも、蓮子が『私も見たい、メリーだけちゃんと見られるのはずるいとか』言うからこう

やってるんでしょくに」

「流石メリー、私のために骨を折ってくれるんだ」

「はいはい、折ってますよ。でも、チューニングが難しくくてね。蓮子の脳で認識できるように可視化するのは大変、本当に骨を折ってるんだから」

「おかげで私もメリーと同じ世界が見られる。メリーさんには足を向けてぐっすりよ」

「いつかも言ったでしょ？ みんな、本当は違った世界を認識しているの。私も、蓮子も、童子さんも。この瞬間だって言うなれば、ほんの少し違ったパラレルワールドが何かの手違いで混ざってしまったようなものなんだから」

「まあ、そんな厳密性はいらないの。だいたいあってればいいじゃない。あ、写ってるね。これはメリーには何に見える？」

「女の子ね」

「それも可愛い女の子だ」

「ええ。童子さんにはどう見える？」

私も、メリーさんの手鏡を見てみた。金髪の女の子が、地面の上で蹲っていた。

「可愛い女の子ですね」

「ほら、みんな一緒。このくらい一緒に見えれば十分よ。ううん、妹にしたいような愛らしさ

「さあ……結界を超えて当人に話でも聞かないとわからないわね」

「さあ……結界を超えて当人に話でも聞かないとわからないわね」

「愛らしい？ ……どうなんだろう。可愛いならわかる。見た目はそうだった。でも、彼女を愛らしいとは感じられなかった。不気味で、気持ち悪かった。背中に歪な羽が生えていた。それを見ただけで、生理的に耐えられなくなりそうな気がした。まるでアイドルに穴をコラージュしたグロテスクな釣り画像みたいに、可愛いのに気持ち悪かった。」

「……いや、まって。何これ？」

「フランドール……」

「だって、これ、フランドールだ。」

「フランドール？ 何か聞いた事があるわね。世界史で聞いた気がする」

「地名ね、北ベルギー共和国とネーデルラント連邦王国を跨がったあたり」

「そうそう、毛織物の産地ですとか用語集で覚えたわ。ということはこっつてあの辺なのかな。ここでこの子は箱入り娘をやっているのかな。今すぐEUまで飛んで行こうか？ そうすればこの美少女を助けて素敵なことになるかもよ」

「さあ？ 結界は時系列も乱れるしね。私たちが見てるのは昔々にいた美少女かもしれない。もし、今生きていても白髪のおばあちゃんかもね」

「そんな夢のないことを言わないの」

フランドール、フランドール、フランドールって誰？

「それにしても董子さんはこの子に夢中ね、一目惚れしたの？」

「彼女はフランドール・スカーレット。吸血鬼です。そうだ、この世界は幻想郷だ。じゃあ、なんで私はここにいるの……北ベルギー共和国ってなに……」

そもそも、こいつってどこなの？ 私がついて、蓮子さんがいて、メリーさんがいる。でも、こいつって部屋の中なんだろうか、外なんだろうか、今は昼なんだろうか、夜なんだろうか、夏なんだろうか、冬なんだろうか。

わからない、気にもしてなかった。考えてもいなかった。手がべとべとになっているような気がした。フランドール・スカーレットを殺したときの返り血のことを思い出した。でも、私の手はどこにあるの？



「春眠暁を覚えずとはいうがね」

揺らされて、起こされた。私の体とロッキングチェアがぐらぐら揺れていた。

「我が家は眠るための場所じゃない。眠るなら家に帰るか、せめて神社にしてほしいよ」

「……ごめんなさい。ちょっと疲れてたのかな」

疲れるような心当たりもなかったけれど、何かに疲れているのかもしれない。何せ普段から眠り続けている身だ。

外はまだ昼間だ。せっかくの春休み。昼を無駄にしてしまうのは最小限で食い止められた。

「付け加えれば、それも売り物だよ」

「座り心地のいい椅子なのはわかるわ」

実際、この椅子は実に座り心地が良かった。ゆらゆら揺れるのが心地よいし、年季の入った黒ずんだ木もおしゃれな風格があった。こう、田舎の老紳士が素敵な余生を送れそうな風格。あいにく、我が家に置く場所はないけど。

椅子でぐらぐらと揺れながら、窓の外の景色を眺めていた。幻想郷は東京よりも少し寒い。春の花の開花も外の世界よりは少し遅いようだ。

「それにしても、君がここで眠るときはどんな夢をみるんだい？ それとも、外の世界に戻っているのかい？」

「夢のまた夢ね。ちなみに、私って消えてなかった？」

「少なくとも、今は君の体はここに残っていたが」

たまに、こういう書き出しのお話がある「私こと宇佐見童子は」みたいな一人称から始まるお話。お前は誰に説明しているのかなんて思うけど——そう考えるとそもそも一人称の小説って誰に語ってるんだとか文学的な考えに至ってしまう。

別に文学的なことに興味があるわけでもない、私は理系だ。もう一つ言えば、私は妖怪ドッベルゲンガーだ。どういう仕組みかは知らないけど、幻想的なクラウドネットワークでもあるのか、私の記憶はドロップボックスに入れたファイルみたいに完全に同期されている。

それでも、たまに、私ってのはなんなのだろうと思う時もある。ここにいて私とは別に、外の世界には童子がいる。たぶん、ベッドの上でぐうぐう眠っているんだろう。

それは私なんだろうか、それとも、ドッベルゲンガーという偽物が私なんだろうか。

「消えるって、どうやって消えるのかしらね」

「何度も言ったことだけど、僕の知る限りでは、まばたきをすると急に消えているね」

まあ、みんなに何度も聞いた話だ。私はいきなり消えるらしい。自分じゃよくわからない。まばたきした次の瞬間には、私は現の世界で目覚めている。

そういうことは幻想郷でもあるそうで「人隠し」なんていうそうさ。でも、私は隠れたり、隠れなかったりする。

現の世界で目を覚ませば私は消える——これは確かな事なんだけど、幻想郷で眠れば消えて

しまうわけでもないらしい。

現の世界で眠ることはこちらに現れることとイコールなんだけど、逆ではないと言うことだ。今みたいに、こっちで眠ってしまうこともある。

「それにしても比喩ではなく夢のまた夢というやつだからね。君がどんな夢を見ているか、気になるのは本当さ」

霖之助さんの期待には応えられそうにない。だって、私はいつも夢のことを忘れてしまう。まるで、私の中から夢が飛び出してしまっているように思える。

「いや……いつも覚えてないの。むしろ、他の人ってちゃんと夢を覚えてるの？」

「曖昧だが、覚えてはいるさ」

「ふうん、ちなみに、最近はどんな夢を見た？」

「香霖堂に来る客が、みな品物にお金を置いてくれる夢さ」

「……切実ね」

夢のない夢のことを話すと、霖之助さんは自分の椅子に戻った。霖之助さんはよく椅子を変ええる。一日中椅子に座って本を読むのが仕事みたいな人だけに、こだわりがあるんだろう。この間は外の世界の会社が粗大ゴミに出したような古びたOAチェアで、今日は玉座みたいな堅くて偉そうな椅子に座っていた。しかし、夢か。

大きく背伸びをして、大きな欠伸をした。スカートポケットにフリスクが入っていた。口に入れると、フリスクの爽やかさが広がった。

「それは、外の世界の菓子かい？」

フリスクを霖之助さんが見ていた。いかにも興味に溢れたって顔だ。

「ええ、ひとついる？」

「ありがとう」

霖之助さんの手の上にフリスクをおいた。興味深そうに眺めてから、口に入れていた。普段からしかめっ面を浮かべている霖之助さんの顔がますますしかめ面になった。

「これは……なんとというか……刺激的な味だね」

「眠気は覚めるし、刺激的で美味しいでしょう？」

どうみてもフリスクが美味しそうには見えない霖之助さんに向かって私は笑った。

「慣れれば美味に感じられるのかもしれないが……」

幻想郷には刺激的な食べ物ってのはあまりない。激辛だとかクールだとかああいう味わいは歴史が浅いんだろう。

霖之助さんはぶかぶかと煙草を吸っていた。どうにも、煙草を吸う人ってのは慣れない。あんなのは百害あって一利なしなのに、どうして「これこそが趣味人だ」みたいに美味しそうに

吸うんだろうか。妹紅なんかはそれはそれは美味そうに吸うし「董子も吸ってみなよ」なんていうけど、私は未成年だと言いたい。

窓からは少し冷たい風が吹き込んできた。人前で煙草を吸うときには窓を開けるということを覚えてくれたのは進歩な気がする。最初なんて「外の世界のシガレットに興味がある、いくつか手配してくれないだろうか」なんて言ってたものだ。高校生が煙草を帰るわけが無いってのに、昭和じゃあるまいし。

「外の世界では春休みだそうだね」

「うん。でも、よく春休みだなんて知ってるわね？」

「外の世界の書物などが教えてくれるよ。だけど、春休みでも女学生の服を着るのは、外の世界では当たり前のことなのかい？」

あんまり普通ではないと思う。私だって、外の世界なら外を歩くときに制服を着たりはしない。私が制服を着る理由はシンプル。他の服を着られないからだ。

私が首の伸びたTシャツを寝巻きにしても、こっちに来るとぴかぴかの制服を身に纏っている。さっきも言ったように、私は私だけど、外の世界にいる董子とは違う。あくまで妖怪ドッペルゲンガーなのだ。で、妖怪ドッペルゲンガーはいつでも制服を着ている。

「いつも目覚めると制服姿なの。これも妖怪だからなのかしら？ 妖怪の服には皆意味がある

とかなんとか、霖之助さんが昔に話していたけど」

「確かに、妖怪の服には意味があるが……君の服はどうだろうね。一度じっくりと調べてみるのも面白いかもしれないが」

「いや、それはちよつとあれだからいらぬ。とりあえずは便利だからそれでいいでしょ？」
夜な夜な女子高生の制服を調べ続ける男つてのは色々な意味で危ない。そもそも、服まで私と一緒に来ていたとなればもつと危険なことになる。私は教室で居眠りするたびに全裸になってしまう。人としての尊厳以前に法的にまずい。

だから今の所は何も問題は無い。まあ……もし何十年経つても制服姿は困るけど。私が40や50になつても制服姿で召喚されていたらちよつとしたホラーだ。

「そうか。……ところで、君もお茶を飲むかい？」

愛想のないしかめ面を浮かべたまま、霖之助さんが言った。別に怒っているとか不機嫌だつてわけじゃなく、普段から彼はそういう顔をしているともうわかつている。

「お願い」

自然にお茶が出てくるのは人徳だろう。というか、霊夢と違って私は普通にものを売つたり買つたりしているからそこまで邪険にされる覚えもない。

霖之助さんはのそりと立ち上がつて、奥へと向かった。私はお洒落な時計を見たり、がらく

たを眺めたり、世界情勢について深く考えたりして時間を潰していた。この店では、ティファールのケトルみたいにばっばとお湯が沸いてはくれない。

がらくたの中に格好いい道具を見つけたのと、お茶が運ばれてきたのは同時だった。

「お茶が入ったよ」

「ありがとう、ところで、素敵な天球儀ね。これなら売れそうだけど」

銅色の金属がいくつも重ねられ、その中に球が有る。天球儀ってやつだろう。

「宇佐見君もそう思うのか。外の世界はやはり進んでいるね。この世界は宇宙や地球という概念を持っている者も限られている。渾天儀の価値をわかる者もなかなか……」

渾天儀ってのは天球儀の異名なんだろうか。これはどうみても天球儀だからそうなんだろう。適当に天球儀を触っていると、

「どうせ売れないものだ。君になら格安で販売するよ」

霖之助さんは、彼としては満面の笑みで笑って薦めてきた。そんな霖之助さんをなんと例えればいいのかだろう？ 服を褒められた乙女とか？ 微かに頬が紅潮する様、声がうわづる様、そして喜びに溢れた様。道具を褒められた彼はそんな調子になる

「是非心ゆくまで見てから決めるといいよ」

薦められたけれど……いや、天球儀ってどう使うの？ 天球儀ってお洒落なおブジェ以外の

使いだなんてあるんだらうか。

「でも、どうやって使うの？」

「それはだね——」

いつものように斜め上の使い方を持ち出してくるかと思っただけど、たぶん正しいであろう使
い方を教えてくれた。

「——何年も掛けてようやく理解出来たんだ。書物を紐解き、幸運にも手に入った新たな渾天
儀の仕組みとも比べて」

その努力は凄い。あいにく、私は実用品として使うことはないだろう。でも。その努力も讃
えて部屋に飾るインテリアとしては悪くもないかな、と思ったときに、

「ただ、一つだけ瑕疵がある」

霖之助さんは眉に皺を寄せながら呟いた。指先には星を描いたものが掘られていて、横に漢
字で星座の名前が書かれている。見るからに精巧な作りで、何が瑕疵かわからない……あえて
いえば星座の名前が聞いた事無いものばかりだった。例えば、ここには「天龍座」と書かれて
いる。そこには柄杓みたいな形の星があった、北斗七星だ。星座だとおおぐま座の一部でいい
んだっけ？ 言われれば、あれは龍に見えなくもない。

他にも見たことが無い星座があった。火炎婆座や芭蕉精座。何かの妖怪なのかな。

「幻想郷の星座？」

「そう言って間違いではないね」

それが瑕疵ってことか。あまり気になることではなかった。

「それならむしろ面白くていいじゃない」

「瑕疵はそれではないよ」

霖之助さんの指先に、文字が書かれている。

「NHKかい」

そんな言葉を呟いていた。霖之助さんは首を傾げていた。いや、確かにNHKと言ってもわからないだろうし私も話を続ける気はなかった。で、何が書かれていたのかというと、

「とにかく、あの賢者様を作ったわけね」

著作・八雲紫と書かれていたのだ。

「ああ、そこにさえ目をつぶれば逸品だと思う。僕も必死に直したのは良いんだが、彼女の作った道具と思うとどうにも縁起が悪そうだね……」

「そんなものを人に売らないでよ」

「彼女の胡散臭さや恐ろしさやその他も外の世界には影響はないんじゃないだろうか」

霖之助さんは願望を口にしていった。いや、あの人なら外の世界までなんかある気がする。

八雲紫という妖怪をなんと言えばいいのだろうか？ 霊夢ならもっとはっきり言ってくれるのかな。「いないと困るやつだけど面倒だから顔をあわせたくはないわね」みたいに。

そんな表現が正しいのかもしれない。一言でいうと面倒くさい。もう一つ足すと面倒で胡散臭い。この天球儀の作りといい、それはそれは凄い妖怪様なんだけど、いつも回りくどい言い方をするし、なんでもわかっているような態度を取るし、妙に馴れ馴れしかったり、そのくせ煙に巻く振る舞いばかりだから疲れる。

……というか、いつも本音を隠しているような、いつも何かを装っているような感じか。だから、苦手なんだろうか。素直に喜怒哀楽を示したりしてくれればこっちも親近感が沸くんだろうけど。いつも不気味で、恐ろしい。

ま、世の中を治めるってのはそういうものなのかもね。人を治める人間は愛されるよりも恐れられるべきだ、と誰かが言っていた。マキャベリか誰かだっけ？ 検索しないと出しせない。「今日は遠慮しておくわ。紫さんに縁の品なんてぞっとしない」

霖之助さんも、それ以上は積極的に薦めることはなかった。八雲紫に縁の品というのがどれほどの瑕疵なのか、彼自身もよくわかっているんだろう。

「そうか。ちなみに、今のは洒落かい？」

洒落……ゆかりにゆかり……なるほど、でも洒落じゃない。私は首を振った。

私が首を振ると同時に、ピロピロという音が聞こえた。電話の呼び出し音みたいな音だ。かといって、私のスマホがなったわけじゃない。圏外のスマホは呼び出されたりはしない。

音が鳴っていたのは陰陽玉だ。元々は、私が来るより昔の異変の時に紫さんが作ったらしい。機能は「離れた人間と会話」をするという機能。うん、まんま携帯電話だ。

異変の後、霊夢は何力所かにこの陰陽玉を置いたそう。電話のようでも便利な道具だし、気持ちはわかる。霊夢は何かと忙しいから。

霖之助さんは心底面倒そうに陰陽玉を取った。

「……もしもし」

「霖之助さん？ 悪いけど、慧音先生のところに行ってくれない？ あとでいいから」

声が店の中に広がる。こういう形でしか音が出せないのか、それともスピーカーモードになっているのに霖之助さんには切り替え方がわからないだけなのか、私は知らない。

「香霖堂は営業時間中なんだが」

「いいじゃない、どうせ客なんてこないでしょ。というか、夜になってからでいいんだけど」

「ああ、霊夢っち、私が一応お客さんよ」

「あら董子、香霖堂にいたわ。じゃあ董子でもいいや、」

「霊夢。じゃあ董子でもいいやなどというのは感心しないね。まるで宇佐見くんが代用品みた

いな言い方じゃないか」

「言われるとそうかもしれないけど、じゃあ董子、愛してるからお願ひ。ちょっと慧音先生のことまで行ってくれない？　メリーさんに用事があつて寺子屋に運んでんだけど、どっかのバカ妖怪が馬鹿なことをしたせいで迎えにいけなくなつたのよ。まったく、あのバカ吸血鬼つたら。真つ昼間から馬鹿な事やつて、そのくせ自分は太陽の光でヤバイとかもうバカでバカね、あとで絶対にご馳走つきで謝罪させてやるわ。だからよろしく、迎えに行く暇がないの。咲夜のご馳走がきたら董子にも振る舞うからお願ひね！」

霊夢は一方的に言い残して電話を切つた。いや、陰陽玉を切つた。

「ご馳走きた瞬間に私が幻想郷にいる保証もないんですが。慧音さんじゃ駄目なの？」
そう呟いた声は、きつと霊夢には届いていない。

「……外の世界の人間は、いつもこんな風に電話に追われているのかい？」
霖之助さんは溜め息を付きながら言った。

「もう一個上の辛さがありますよ」

まあ、電話ならまだいいかもしれない。電話やメールで済ませていた牧歌的な時代は終わつて、私たちは既読スルーのプレッシャーにも耐えないといけないんだから。

日が沈むまで、適当に時間を潰した。

霖之助さんには同情されたけど、別にメリーさんを迎えに行くのが苦痛だったわけでもない。里に行つて里を見るのも悪くない。それに、ちよつとお腹が空いていた。霖之助さんはお茶は飲むけどものは基本的に食べない。

——道具で精神を満たすことが僕にとっての栄養だからね

前に、霖之助さんが言っていた。それは冗談じゃなくて、本当に飲まず食わずでも死なないらしい。半分が妖怪だからなんだろう。たまにお茶菓子とかを出してくれることはあるけど、あれはあくまで趣味のようだ、タバコなんかと同じで。

妖怪つてのはそんな生き物だそうさ。飲まず食わずでも死なない——その代わり、自分のアイデンティティになるものを欠かすと消えてしまうらしい。例えば、小傘ちゃんなら人を驚かさないと飢え死にってしまう。というか、私や子供たちが驚いたふりをしてあげないとずっとすぐに飢え死にしてしまうだろう。

ああ、メリーさんつてのは神社に住んでいる居候。自分が「メリー」と呼ばれていたこと以外は何も覚えていないという外来人。去年の冬に、神社に倒れていたそうさ。

記憶もないんじゃない世界に返しても路頭に迷うんじゃないかということで、霊夢が神社の中にある空き家を貸している。昔、神社にエレンさんつて人が店を出していたらしい。店を出してから三日後にはもう店があったことを忘れていて、その家は空き家になったそうさ。

——あいつの本名はエレン・ふわふわ頭・オーレウスっていうの。

つてのは霊夢談。冗談なのか、本当にそんな珍妙なミドルネームを持っているのか、私は知らない。私知っていることは、これまでに計四回「はじめまして、よろしくね」とエレンさんに挨拶されたことくらいだ。

私はのんびりと道を歩いてきた。霊夢は夜からでもいいと言っていた。なんともアバウトだけど、この世界の人はあまり細かい時間を気にしない。当たり前と言えば当たり前だろう。幻想郷の人間は、鐘の音や陽の沈み方で時間を把握する人がほとんどだ。

香霖堂には機械式のかげ時計があるけど、時計を持っている人もあまり多くない。時計つても、かなりの高級品らしい。クォーツ時計を百円で買えて、そもそも誰もが携帯電話で正確な時間のわかる外の世界とは違う。

だから、私は春の陽気を楽しみながらのんびりと歩いてきた。夜でもいいと言うからには、まだ早すぎるのかもしれない。妖怪だからなのかはわからないけど、私は夜でも目が見えるし、人通りは殆ど無い。人間は、基本的には里から出ないからだ。道は、それなりに整備されている。コンクリートで舗装された道ほどとはいかないけど、歩くのに不自由がないほどには整備されている。たまに妖精や妖怪が空を飛んでいくだけの道を歩いて行くと、光が見えた。

道の脇には木々が生い茂っている。その中に、光が浮かんでいたその光は不思議だった。そ

れ自体が発光しているのだろうか？　まるで、宝石が宙に浮かんでいるように見えた。光に向けて歩いていった。まるで、光に引かれる虫みたいだなと内心で思った。実際、飛んで火に入る夏の虫を笑えない。興味と好奇心だけで、得体の知れない何かを私は目指してしまっている。もちろん、私は虫じゃないから、それなりに警戒していた。私が接したことのある妖怪はみんな親しみやすくて気のいい人ばかりだけど……

——いい？　妖怪はあくまで退治されるもの。董子は見たことはないかもしれないけど、世の中には本当に危ない妖怪もいるのよ？　それは心に留めて注意しないと駄目なの。

霊夢はいつも、口を酸っぱくして言っている。だから、一応私だって警戒はいつでもしている。まあ、それ自体もドキドキして楽しいのも本当の話だけど。

「ミミックみたいな妖怪だったらどうしよう？」

小さく口に出して、私は光を目指した。あいにく、宝石で人をおびき寄せる宝箱や食虫植物の姿は無かった。私の向かう先には小さな女の子の姿が見えた。

……もちろん、それがただの女の子であるわけがない。私は彼女を知っていた。

「あら……フランドールさん……よね？」

フランドール・スカーレット。吸血鬼の妖怪。子供のように小さな体から歪な枝のような羽が伸びていた。その先には宝石のような何かがついていて、七色の光を放っていた。

「うん、私はフランドール。どこかで会ったことがある？」

「え？ いや、たぶん初対面じゃないかな」

知ってる。知ってはいたけれど、彼女に出会った記憶はない。幻想郷縁起や新聞で彼女のこのを見たことはあるけれど……。

「そう。どこかで会ったことがある気がしたの。あなたは董子さんだよ。この間新聞で読んだよ。うん、私はフランドール・スカーレット。よろしくね」

友好的で穏やかな言葉が投げられてきた。でも、視線は私を向いてはいなかった。歪な枝み
たいな羽を小刻みに動かしながら、どこかをじっと眺めていた。

……息が詰まるような気がした。喉がからからになりそうだった。彼女を見たら、誰だって
そうなるんじゃないだろうか。阿求の書き方で言えば「危険度・極高 人間友好度・極低」と
なるんだろう。ありとあらゆるものを壊す、謎だらけの妖怪。

幻想郷縁起には閉じ込められていても、引きこもりだとも書かれていたけれど……こうや
って目の前にいるからには、閉じ込められているわけではないんだろう。

「よろしく。フランドールさん」

「よろしく、董子さん」

阿求が書いていたように危険な存在と思うには、その口調も態度も穏やかだった。阿求が書

いていた挿絵よりも、ずっと愛らしく見えた——なのに、気持ち悪かった。鳥肌が立ちそうだった。なんて、いえないんだろう。フランドール・スカレットの全部は重なっているように思えた。ああ、こんな表現でいいんだろうか。こう、見た目も声も言葉も何も、ただの子供のように見える。私の理性は、彼女を子供のように感じてしまう。

だけど、もっと深い所で……本能か何かで……私は怯えていた。

——彼女に関わるような危険を冒してはならない。

私の本能が、必死にそんなことを訴えかけてくるように思えた。

彼女の可愛らしい顔も、透き通った声も、七色に輝く羽が小刻みに動く音も、何もかもが気持ち悪かった。綺麗な顔に何かをコーラージュした気味の悪い写真にガラスを爪で引っ掻いた音のように気持ち悪かった。

でも、私の視覚や聴覚や理性はそんなことを感じてはいない、目に映る姿は愛らしかった。

耳に届く声も綺麗な声だった。物腰は穏やかで友好的だった。私の理性も五感も恐怖を感じていなかった。なのに、私の本能は荒ぶっていた、それを、恐怖だと伝えようと。

昔、こんな話を聞いたことがある。ネットで検索したただだから、正しいのかは知らない。でも、一理はあると思った。妖怪ってのは、なにがしかの物を擬人化した存在——というのは有り触れた話だ。その中でも吸血鬼ってのは「伝染病」を擬人化した存在らしい。

例えば、吸血鬼は川を越えられないという。それは伝染病は川を越えられないからだって話。確かに、鼠や虫を媒介にする病原菌じゃ、簡単には川は越えられないだろう。他にも、陽の光に弱いだとかニンニクに弱いだとかは殺菌作用があるからなどなど。

それが正しいのかはわからない。……というか、目の前に吸血鬼がいるのにそんな合理的な考えをするのもおかしい話だ。だけど、一理はあると思った。私は、目の前の女の子を見て、蠅のたかった死体に対してと同じくらいの恐怖を感じてしまう。

その場から逃げ出したかった。

「董子さん、あなたは珍しいひとだね。みんな、私を見ると逃げるの。私の影をみるだけでなんて恐ろしいって逃げるの」

どうして？　なんて聞けない。

——紅魔館の野外パーティーに参加した時に、ふと館を見ると妹様がうろついている影が見えたよ。恐ろしい。

幻想郷縁起で誰かのコメントが載っていた。匿名だから誰かなんて知らない。それは間違いない。正しい感想なんだろう。間近で見るとフランドールは、意味もなく恐ろしかった。逃げる理由なんて全身で感じている。

「別に、逃げる理由もないから。襲ってきたなら逃げるけど」

それでも、私は逃げなかった。なんでって？　なんでだろう？　人間とは本能を理性で乗り越える物だからである。こう言ってもいいけど、なんかかっこつけすぎだな。

そうだな、フランドールが一人で明後日の方向を見ている姿を見て、まるで昔の私みたいだと思ったからだろうか。

「私は幻想郷の人間は襲わないよ。約束だから。でも、あなたは不思議なひとだね。人間に見えるけど、妖怪みたいな臭いがする」

約束——幻想郷縁起にも、そんなことは書いてあったっけ。

「そこは色々あって……簡単に言うと、外の世界の人間の意識が操る妖怪みたいな感じなの。って言うってわかる？」

「よくわからない。でも、襲わない。あなたなら襲えるかもしれないけど、別に、襲っても仕方がないし」

「それはよかった。ところで、何をしてたの？」

「フランドールを探してたの」

私を探す？　自分探してやつだろうか。もう五百年は生きてるはずなのに、意識高い若者みたいなことを言うな。

「そう。何か見つかるといいわね」

私はあんまり意識が高くないから、そのくらい的事しか言えない——それに、いつまでも話をしているわけにもいかない。メリーさんを迎えに行かないと。

「うん、片付けはちゃんとしないと落ち着かないもの。でもありがとう、励ましてくれて」
ちようど、フランドールもこっちに笑みを向けてくれた頃合いだ。悩める少女を励ましていいことをしてしまつたと立ち去ろうとしたとき——鳥肌が立ちそうになつた。

その笑みの中に、牙が見えた。口の中に白く輝く牙が見えた。それは犬歯、あるいは、人の血を吸うための道具。ぞくり、と背筋に寒気が走つた。余程強く気を持っていないと動くこともできなかつたと思う。それは、恐ろしかったからなんだろうか？ 違う。

動きたくなかつた。その顔に射すくめられた瞬間。動きたくなくなつた。動けない、じゃない。動きたくなかつた。吸血鬼に血を吸われると何も考えられないゾンビになるっていう。幻想郷縁起に書いてあつたし、吸血鬼が美女の生き血を吸つてハーレムを作るなんてのは昔ながらのホラー映画じゃ定番だろう。

そりゃあ、なるよね。なっちゃう。これはやばい。一番近い感情は恋なのかもしれない。それをもつともつと煮詰めたような陶酔。フランドールの顔を見た瞬間、間違ひなく私は魅了されていた。魅了の魔術なんてのも吸血鬼のイメージの定番だけど……あれは本当だ。きつと、このままだと人間の尊厳とか私の人生とかどうでもよくなつてしまう。このまま立ちすくんで

いたい。襲って欲しい、血を吸っておもちゃにして欲しい。

本気で、私はそんなことを考えてしまった。私は必死に浮かび上がった。友好的な女の子が、とてつもなく恐ろしかった。きつと、生き物は本能でこれをわかってるんだ。吸血鬼に魅了されて自分を失わないために、警告しているんだ。

私は逃げるように飛び去った。なんてことはない。私だって、フランドールから逃げる一人じゃないか。

……空を飛んで、テレポルトまでして、遠くに逃げた。フランドールの気配を感じなくなる、自分が悪いことをしたように思えた。逃げるように飛び去ってしまって。落ち込んでたりするんじゃないかな。今度会ったら、お詫びを言おうか。

「こんばんは、宇佐見です。メリーさんはいますか？」

少し待つと、返事が返ってきた。陽気な声が返ってきた。この声は慧音先生じゃなくてメリーさんのものだ。

メリーさんについて知っていることは、あまり多くはない。何せ当人が名前しか知らないと言うんだから仕方がない。多くないからといって、メリーさんのことを知らないわけじゃない。

白い肌に金色の髪。たぶん、日本人じゃないんだろう。だけど、とても流暢に日本語を話す。背丈は私より大きい。幻想郷の平均身長は外の世界よりも低いと思うけど、外の世界で見てもわりと大きな部類だと思う。

年は、私よりは上だと思う。綺麗なお姉さんって感じ。見た目だけなら。

「ハロー！ スミレコサン！ ドウシタノ！」

滅茶苦茶なイントネーションで話しかけられた。反応に困る。

「……なんですかその発音」

「イヤア、ニホンゴムズカシイネ。ベリーベリーハードヨ。デモオールオツケー！ ハートガ コミュニケーションニハベリベリインポート！」

そして、これがメリーさんだ。うん、いつもの、平常運転のメリーさんだ。

「とりあえず本当に反応に困るんで」

「もう、そこはもつとノリよく突っ込んでくれないと、お前本当は日本語べらべらやんけ。ものごつつくいわずぞ、みたいに」

「なんで関西弁なんですか。いや、関西弁だとしても絶対おかしい気がするけれど」

「せやるか？」

「……せやで」

このように非常に愉快な人だ。いい意味で面倒くさくていい意味でうるさくていい意味で陽気な人だ。いい意味でつてのは魔法の言葉だと思う。なんでもいい意味になつてくれる。

メリーさんがどんな人かと言えば、もうメリーさんみたいなのという言葉形容詞にしたい。メリーさんはいい意味でメリーさんだ。

私だけではない意味で収拾が付かなくなりそうなところに、これは本当にいいところで慧音先生の声が聞こえた。

「やあ、宇佐見君。何か用事でもあったのかな？」

私は霊夢の代わりに迎えに来たと言うことを説明した。

「なるほど、宇佐見君に手をかけさせて悪いが……私もちょっと里で用事があってね、霊夢の代わりに送ってくればありがたい」

そんな気遣いをされて、断る理由もない。元々迎えに来たんだし。

「もちろんです」

「ありがとう。じゃあ、メリーさんはすぐに行くのかな？」

「やだ、先生ったら。まるで終電を逃して欲しいみたい」

「行くんだったらちょっと待って欲しい」

慧音先生はメリーさんの面倒くさい発言を完全に無視して奥に消えていった。頼もしい人だ。

「そうそう、董子さん、大事なことを思い出したのよ」

その間に。メリーさんが耳元で囁いた。

「そうですか」

「そんな無関心に言わないでよ」

普通なら、記憶喪失の人が何かを思い出したと言えどもっと驚くものなんだろう。そういう時期が私にもありました。もう、そんな時期は通り過ぎてしまったけど。

「じゃあ、何を思い出したんですか？」

「やっぱり関心度が低いわね。もっと気合いを出すの。ええと、まずはうしろに45度の角度でのけぞって、それから天井を突き破る勢いで飛び上がって」

「慧音先生には悪いんですけど急用を思い出したんで帰っていいですか？」

だって、こんなやりとりを何度も繰り返してきたから。純真無垢な董子さんも汚れてしょっぱい対応を返してしまうほどには。

「もう、じゃあ仕方ない。せめて話くらいは聞いて。本当に大事なことなの」

「はあ」

「それはなんと、パーマン五号の本名よ」

「は？」

「だからパーマン五号。もしかして、パーマン知らない？」

いや、パーマンは知ってるけど。メリーさんは急に歌い出した。一応、その歌がパーマンの歌だってこともわかる。

「存在は認識してます」

しかし下手な歌だな。何が悔しいかというと下手な歌がチャームポイントのように見えてしまうことだ。世の中全部見た目なのか。

「だったら、この気持ちもわかるでしょ？ パーマン一号は須羽ミツ夫、パーマン二号はブービー、パーマン三号は星野スミレ、パーマン四号は大山法善。それはもちろん覚えてたけど、パーマン五号の本名だけがずっと思い出せなくて」

そんなどうでもいいことを思い出す前にお前には思い出すべきことがあるんじゃないだろうか。そう思った心の中を口に出さなかった私の自制心を褒めてやりたい。

「でも、思い出したの！ パーマン五号の本名は山田浩一！」

パーマン五号って誰さ。そもそもパーマンが何号までいるかも興味ないし……。

「それはよかったですね」

「なんでそんなに興味ないように言うの？」

「本当に申し訳ないんですけどパーマンには何一つ興味がなくて。そもそも、漫画自体あんま

り読まないし」

「ええええええええ！ だって、この間ジョジョのネタ言ってたじゃない。『リサリサ先生煙草が逆だぜ』とか言っちゃって。流石にジョジョは読んだことはあるでしょ？」

ああ、そんなこともあったつけ。妹紅が間違えてフィルター付きの煙草を逆に啜えてたときに、私はそんなことを言った。というかメリーさんとハモっていた。

「いや、あれはネットで見ただけで。正直読んだことはないです」

ネットで流行ってるネタってのは勝手に入ってくる。それだけの話だった。

「うわあ、こういうにわか駄目なのよ。魔理沙みたいな女の子を見たら『俺は魔理沙なわけ』とか言わせるタイプで、仕方ない、まずはやっぱり必修の藤子F先生から私がオススメを説いてあげるから」

漫画は興味がないといった発言をこの人は記憶してないのか。健忘症なのか、記憶障害なのか、いや、本当に記憶喪失者か……なんて考えていると、救世主が現れた。

「すまないね、待たせてしまった。これは少ないが謝礼だ」

慧音先生が一刀両断の快刀乱麻にメリーさんのどうでもいい話を切ってくれた。

「いや、悪いですよ。大した事はしてないですから」

「そんなことはないさ。助かったよ。いやいや、恐れ入った。いつになく楽しい気分だよ。私

もあのように人に知識という楽しみを与えられるように精進しないとなあ。だから、これは心ばかりの礼だ、受け取って欲しい」

「そもそも、何をしに来てたんですか？」

考えてみれば、寺子屋にメリーさんが来ていた理由は知らない。霊夢からも、迎えに行くと頼まれてるだけだし、

「ああ、洋書がいくつか手に入ったから内容を教えて欲しいと言われたの。内容を簡単に要約して——あとは、時間が余ったからちょっとした心理学兼教育学の話をしたの。思考発達段階説、まあ、ジャン・ピアジェの話をしてただけど」

「ああ、外の世界の教育学とはいかなるものかと前から思っていたんだが、いやあ、素晴らしい。見聞を広めるとは常に清々しいね」

ジャン・ピアジェって誰だ。

ああ、もう一つ。メリーさんは自分のことは何も知らないけど、色んなことを知っている。パーマンみたいなどうでもいいことから、慧音先生が感心することまで。私の宿題を簡単に解くことも出来る。

なんでそんなにもものを知っているのか、どこまで知っているのか、どこで蓄えたのか、そういったことは何もわからないけど、急に、「何かを思い出した」とか言い始める。その度に、

メリーさんは何かについて詳しく把握する。思いだしたと言ってるけど、まるでその場で把握したように錯覚してしまう。

だいたいはパーマンみたいなどうでもいいこと。たまには、もつと世の中の役に立つことを思い出す。例えば、科学のことだったり。

まあ、私だって外の世界の人間だ。ただの女子高生の持つ程度の知識でも、こっちは神妙に聞いてくれる。科学とやることで言えば、やっぱり外の知識とこっちは違う。

でも、私とメリーさんの知識の差は、幻想郷と外の世界くらいの差はあるように思える。もちろん、メリーさんが外の世界の方。正直、私には全く理解出来ないことも多い。そういう時は随分と論理的に話すから、口から出任せをいっているわけじゃないんだろうけど。

「それは心ばかりの礼ばかりだが受け取って欲しい」

それはさておき、慧音先生がメリーさんに袋を渡していた。

「いや、本当に、お礼なんて」

「本当に、ただの心だよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「もちろん。宇佐見君も受け取って欲しい」

私は素直に「ありがとうございます」と受け取った。人から素直にお礼を言われるって、嬉

しくなるもの。

「さて、私は所用があるから出かけないといけない。宇佐見君も面倒だが頼むよ」

「はい」

私はメリーさんを連れて寺子屋を後にした。お礼か、いくらくらい入ってるのかな。まあ、こういったものを道端であけるのもマナーがなってないか、帰ってから確かめよう。お金とも限らないし。

それにしても……少し、というかかなりお腹が減っていた。考えてみれば、香霖堂をでた段階でお腹は減っていた。そもそも私は今日何かを食べた記憶もない。現の世界でもヤクルトと牛乳を飲んだくらいだ。せめてシリアルくらいは食べておくべきだった。

「少し、お腹が空きませんか？」

それでも少しというのは、女の子という生き物は殊更に空腹をアピールしてはいけない生き物だからだ。本音を言えば、今から天下第一品に行つてラーメン（こつてり）を食べたいくらい減っていた。

「私はお昼は食べたけど、董子さんは食べてないの？」

「色々あったので」

香霖堂で昼寝をしてしまったのが敗因だった。

「慌てて帰る必要もないし、軽く食べてもいいかもね。懐もあたたかいし……お金を持つなんて久しぶりな気もするな」

無職の居候なら、確かにお金を持つ機会も希有だろう。霊夢からお小遣いをもらえとも思えないし。何せ霊夢自身がまともにお金をもってやしない。

「この店を見る度に思うんですけど、凄い名前ですね」

「何が？」

「食べるなって」

目の前には食堂があつた。食堂というカレストランって呼んだ方がいいんだろうか。なかなかにお洒落な西洋風の建物だ。人里がどんな場所かと言えば……一番分かりやすいのは時代劇のセットだろうか。そんな中に、お洒落な石造りの建物があれば目立つ。そのくせ「食べるな」と看板に書いてあるのだ。

「なるほど」

「なんでそんな接客業らしからぬ名前を付けているんだろうかと」

「食べるな、ってのはギリシヤ語で食堂の意味なのよ。ちよつとした洒落でしょうね」

「へえ」

豆知識を覚えた。こんどクラスの友だちにでも会ったら話の種にでもしてみようか。

「いい豆知識でしょう？ 40へえくらいはあるんじゃない？」

「40？」

「60くらいあるかしら？」

「40とか60とか、どういう基準なんですか？」

「え？」

私とメリーさんは同時に怪訝な顔を浮かべていた。

「知らないの？ へえへえへえへえってボタンをおしてへえへえへえよ」

「なんですかそれ？ 漫画ですか？」

「嘘、本当に知らないの？」

「あいにく」

メリーさんの言っていることはよくわからなかった。それにしてもお腹が空いた……。もう、すっかり夜だしなあ。しかし、私の体つてのは食べないと死ぬんだろうか。現の体とのリンクがよくわからない。

決闘とかをやったら姿勢がよくなったり筋肉が付いた感じはある。寝てる間にびくんびくんと筋肉が鍛えられてるんだろうか。あれみたい……名前を忘れたけどクリステイアーノ・ロナウドが宣伝してる付けてるだけで電気で筋肉が鍛えられるとかいうあれ……あれはなんて

名前だったかな。無性に検索しなくなったけど、あいにく圏外だ。人とのコミュニケーションで検索欲を紛らわせるしかない。

「まあ、洒落のわかるお店だから、料理も気がきいてるんじゃないかしら？」

「でも、ちょっと高そうですね」

外に値段のわかるメニューでも貼ってくればいいんだけど、無駄に気取ってるのか貼ってない。私も、日本銀行券はいくらか持ってたけれどこの世界のお金はほとんど持ってないし。

「たまには贅沢しましょうか……年上として、こんな時くらいおごるのもやぶさかではないのでも、慧音先生はいくら——」

メリーさんがいくつなのか、私もメリーさんも知らない。まあ、見た目からすれば間違いないく私より年上だろう。普通にお酒を飲んでるし。

「……まじか」

でも、そんな大人の顔が強ばっていた。

「何がですか？」

「お金じゃないの」

封筒には紙が入っていた。

「図書券ですね」

紙幣ではなかった。

「図書券はつらいわ……無職なのよ？　無職なのよ？　大事なことだから二回言うくらい私は無職なのよ？」

「でも、さっきはお礼なんてとか言ってたような」

「あれは大人の美学！　和の心！　謙遜ってやつなの！　というかこんな状況なら絶対お金と
思うじゃない？　しかもそこそこ厚みあったから期待してたの！」

和の心というにはほど遠い見た目から、大人の美学の欠片もない嘆きが放たれていた。
「本を読んで心を豊かにしようという先生のかなんでしよう」

「きつとここに来るまでに本は山ほど読んでるわよ。そして本や知識でお金は膨れないの！」

それはもうびっくりするほど子供だ。本を山ほど読んだってのは嘘じゃないんだろうけれど。
私とは知識の厚みが違うし。

「いっそ、換金できないかな。霧雨店って金券も買い取ってくれるのかしら」

「それは人として許されざることで」

「実は私人間だと思ひ込んでる妖怪かもしれない」

「まさか」

「だって、保証はないでしょ？」

確かに、保証はない。

「見ればわかりますって」

でも、妖怪ってのはやっぱり本能で理解出来る。フランドールだとか、レミリアさんだとか、靈鳥路さんみたいに羽の生えてたりする妖怪は見た目でわかる。でも、ぱっと見では人間と身体的特徴の変わらない妖怪——レティさんや美鈴さんやその他も、妖怪だと直感で理解出来る。「みんなそういうけど、そこが私にはピンと来ないのよねえ」

「慣れればわかりますよ」

「と言っても、私がかつちに来たのは去年よ？ いつになったら慣れるのやら。実はさ、私は人間に化けてる妖怪だとか、元人間の妖怪かもしれないでしょ？ だったら換金しても許されるのでは」

絶対には言えないけど……どうだろう。元々人間だったというアリスさんや、人間を模して生まれたというプリズムリバー姉妹でも、やっぱり私は直感で別の生き物だと思ってしまう。マミさんみたいに化けられればともかく……でも、マミさんも化かすことがアイデンティティだから特別製だしなあ。

おまけに、酷いことを思ってしまった。メリーさんってのは紫さんと割と似ている。金色の髪や白い肌であることが大きいんだろうけど、単純に顔や体格だけを見ても似ている気がした。

八雲紫は別に羽や尻尾やその他があるわけじゃない。阿求の描いた絵の中の彼女は、人間と変わらない見た目をしている。でも、彼女を一目見れば、阿求が「もっとも妖怪らしい妖怪」と書いた理由が一瞬でわかるはずだ。彼女は人間じゃないと理解出来るはずだ。言葉じゃわからない禍々しさを感じちゃうはずだ。

だから、紫さんに似てますねとは言えない。それはメリーさんのイメージにも悪い。「妖怪でも人間でも、人としてやっちゃいけないことはあるんです」

別に、人間でも妖怪でも、関係ないと言えば関係はない。里では人を襲わないだとか、この世界には万人が守る決まりがあって、それで回っている。それで十分だ。

「しょうがない。じゃあ、董子さん……奢って……もしくはお金を貸して……」
メリーさんにお金を貸すのと奢るのはほとんど同義だ。

「ニートにお金を貸せと言われても。というか返してもらった記憶はないし」
「いざとなったら体で奉仕する考えはあるわ。宿題を代わりにやってあげたり」

確かに、メリーさんなら宿題を簡単に片付けることは出来るだろう。
「宿題ってのは自分でやらなきゃ意味がないじゃないですか」

でも、宿題ってのは要は復習のためにあるものなんだから、自分でやらなきゃ意味がない。
「董子さんは真面目ね」

「真面目というか、当たり前のことじゃないですか？」

「うーん。それはそうなんだけど、ずっとそれが当たり前だと思ってたの？」

「当たり前じゃないですか。漫画じゃないんだから。毎日真面目にこつこつ勉強、それが学生の本分ですよ」

なんて言ってるけど、正直幻想郷を知ってから勉強は捗らなくなった。勉強をするしか時間の潰し方を知らないあの頃と、今の生活は違いすぎるもの。でも、来年は受験だし……いい加減居眠りも控えて宿題はしっかりやらないとな……。

「偉いわね。じゃあ、わからないところがあれば勉強を教えてあげるわよ。それでどう？ それに、最近は色々仕事のあてを探してるの。お金がないのは不自由だからね」

「仕事って何をする気です？」

「別になんでもいいわ。なんとなく、なんでも出来る気がするし。私って実は天才じゃないかなあって。でも脱ぐのはNGね、まあ、水着くらいは考えたくないけど」

「そうかもしれないね」

適当に返事を返した。適当に返した理由は流さないと話が長くなるからだ。メリーさんはだいたいの場合は話が長くて、面倒くさい。さっきのパーマンの話がメリーさんの日常って考えてくれればわかりやすい。

適当に返事を返したけど、確かにこの人は凄いな。賢いとかもそうだし、滅茶苦茶に足が速かったり、芸術の才能もあったり。それはそれとして、私はそんな話は流すのだ。

「この世界に水着なんてあるんですか？」

「あるでしょ？ この間霊夢が片付けをしているときに水着を干してたわ。割と普通の水着だったわね。ワンピースで露出は足りないけど」

霊夢が水着を着て水遊びつても想像が付かない。川で手づかみで魚を捕まえる姿は想像出来るけど……。

「へえ。まあ、奢ってもいいんですが、どうせお団子を買うくらいのお金しかないですよ？ 私も無職ですし。いや、メリーさんと違ってニートではないけど」

「あら、私はきれいな好きよ？」

ちなみにメリーさんの部屋は物に溢れている。神社に流れ着くがらくたを部屋に運び込んでいるせいだ。突っ込むのも面倒なので返事をしなかった。

「あ、今のはNEETとNEATをかけた高度なジョークでね。ああ、Neatというのはこざっぱりしたという意味の単語なのだけど」

「それはわかってるんで大丈夫です。でも、自分で自分のジョークを解説するのは寂しいんで辞めた方がいいんじゃないかと」

「だって董子さんが無言だから伝わってないのかと思っちゃって」

「それは伝わってますよ。ただ、メリーさんの部屋がゴミ屋敷なのに、きれい好きというのはジョークにもならないかなあって」

「あれはあれで効率的な配置なの。外の世界のがらくたにもまだまだ使えるものが多くてね。それにしても、最近董子さんのあたりがきつくなってきた気がする……最初は本当に心配してくれてたのに……ここところは邪険に扱われるし。うう、お姉さん悲しい、董子さんがぐれてしまったようで」

反応するのが面倒になったので、私は足を進めた。当たりが強い、強いかな。どうなんだろうな。初めてメリーさんと接したときは、もちろんもつと丁寧な物腰だったと思う。だて、自分より年上に見えて外国人に見えて、ましてや記憶喪失の人とどう接していいのかなんてよくわからなかった。もしかしたら、ちよつと怖かったのかもしれない。

そもそも、他人とどうやって接するのが自然なのか、私には未だによくわからない。私は霊夢のことを「霊夢っち」なんて呼んでるけど……あれは……ちよつと幻想郷デビューで調子に乗りすぎたかなあって気もするし……未だに自然には呼べない、たまに「霊夢」って普通に呼んでしまう。みんなそう呼んでるものもあるし。というか、意外とあだ名で呼ばれる人っていないんだよなあ。

「それはやっぱり自業自得なんじゃないかと」

ちよっと迷って、ちよっと勇気を出して、私は言った。たぶん、こういう会話をするのが「友だち」ってものだと思う。本音を言えば「私の態度が不快でしたか？ 不快なら教えてください、改めますから」って言いたいんだけど、いくらなんでもそんなことを聞く人はいない。

「ああ、花の命は短く、私が尊敬される時間も短いのね。佳人薄命だわ」

「自分で自分のことを佳人だとか言っちゃう女の人って。というか薄命もなにもびんびんしてんじゃないですか」

……どうなのかな。こういう話をするのは不躰だとか、目の前で笑ってるメリーさんも実は心の中でイラッとしてたりするんだろうか。わかんないな。みんな、こういうのを自然に出来るんだろうか。それでも、こんな話を出来るなんてのは私にとっては大きな一歩だ。

「佳人薄命というのは運命に弄ばれて不幸になるってことよ？」

「それは大変勉強になりました」

メリーさんはもの凄く自慢げにドヤドヤやって感じの顔を浮かべていた。ドヤ顔王ナンバーワン決定戦があれば、布戸ちゃんといい勝負になるんじゃないかな。